韓国の地域経営型グリーン・ツーリズムにおける先進事例分析

近藤 功庸 (旭川大学経済学部)

宋 柱昌 (社団法人農政研究センター)

山本 康貴 (北海道大学大学院農学研究院)

Current Situation of Village-Based Rural Tourism in Korea

Katsunobu Kondo (Asahikawa University)

Juchang Song (Center for Food, Agricultural & Rural Policy)

Yasutaka Yamamoto (Hokkaido University)

The objective of this paper is to investigate the successful cases of village-based rural tourism in Korea. This paper particularly focuses on distinguishing between the villages with regard to their programs for rural tourism and the existence of a leader for their rural tourism activities. We conducted our field work in Village A of the North Chungchong Province and Village B of the Kyounggi Province in Korea. In both cases, we discovered that diversified

experience programs based on local resources such as abundant natural environment and traditional rural music are provided and the leaders of rural tourism are devoted to the rural tourism activities and are independent of the role of the top administrator in their own local authority. Further, we discovered that the number of tourists visiting each village increases every year.

1. はじめに

韓国におけるグリーン・ツーリズム (GT) の嚆矢は、1984 年の観光農園開発事業による観光農園モデル地区 (12 カ所) の造成だといわれている¹⁾。その後、観光農園は、2000 年までに、491 カ所造成されたものの、経営不振に陥った観光農園が多く見られた (宋 [12])。その理由としては、GT 市場の展開が未成熟な段階にもかかわらず、観光農園への初期投資が過大であった点、GT がサービス業であるとの認識が農園経営者にも未だ薄かった点などが指摘されている (姜 [5])。こうした反省点を踏まえ、2002 年に、農林部 (日本の農林水産省に相当) は、農山村にある観光資源の有効利用によって、地域活性化を目的とした緑色農村体験マウル事業を開始し、マウル (集落) 単位による GT が本格的に展開することになる²⁾。2002 年からは、週休 2 日制の拡大による余暇時間の増加なども見込まれており、韓国では GT への関心が高まっている。

韓国における GT³⁾ の取り組み実態などを明らかにした我が国における既存研究は未だ少ない (宮崎

他 [8]、宮崎 [9]、浦出・宮崎 [17]) が、浦出・宮崎 [17] は韓国の「地域経営型 GT」(マウル単位で実施する GT、宮崎 [9]) の展開において、次の 2 点について問題提起をしている。第一に、GT の体験プログラムなどにおいて、どのマウルでも、その内容が似通っており、あまり差別化されていない点 (「GT 内容の差別化」) である。第二に、韓国ではマウル単位で GT に取り組むのが一般的となっている。このため、マウルの里長 (日本の村長に相当) が GT 運営の代表 (リーダー) を兼務する事例が多く、GT を運営できる里長以外の GT リーダー、あるいは GT リーダーを兼務している里長を実質的な GT リーダーとして補佐できる人材などが必要となっている点 (「GT リーダーの確保」) である⁴⁾。

そこで、本稿では、韓国の地域経営型 GT の先進事例が、浦出・宮崎 [17] の問題提起した 2 点 (「GT 内容の差別化」と「GT リーダーの確保」) に関し、どのように対応しているかという点に着目した事例分析を試みる。本稿で分析対象とする事例は、忠清北道 A マウルと京畿道 B マウルであり、いずれも

韓国では先進事例とみられている⁵⁾。

2. A マウルの事例

(1) A マウルの概要

A マウルは、忠清北道の最北端に位置する丹陽郡の山奥に立地している一集落であり、ソウル市から車で（高速道路を利用）、3 時間程度の距離にある。この地域は、北は江原道、東と南は慶尚北道に接しており、朝鮮半島北部の白頭山から朝鮮半島を南北に縦断する山々に囲まれた自然の豊かな景勝地として、知られている。A マウルには、39 戸（うち農家 34 戸）の世帯が居住している。A マウルの耕地面積は 79 ha であり、主としてトウモロコシ、唐辛子、にんにく、スイカなどが生産されている。

(2) A マウルにおけるグリーン・ツーリズムの展開

1) グリーン・ツーリズム活動開始の契機

A マウルにおける GT 活動は、現マウルの代表（リーダー）である C 氏によって開始された。A マウル出身でもある C 氏は、釜山での会社勤務などを経た後、A マウルで農業経営に着手し、他のマウル住民に先んじて、農家民宿にも取り組んだ。マウルにきた大学生が自ら収穫したトウモロコシを喜んで買っていく姿にヒントを得て、収穫体験事業にも着手した。

とはいえ、当初は、GT 活動について、マウル住民から理解と協力を得ることが難しかった。そのため、C 氏は、GT 活動における事業実績をマウル住民に示しつつ、マウル住民と粘り強く対話を試みた。こうして、A マウルでは、農家を含め、全世帯が GT 活動に参加するようになった。

2) A マウルの観光資源と体験プログラム

A マウルの観光資源は、けやきの森、洞窟、溪流などの豊かな自然である。特に、A マウルのけやきは、200 年から 500 年もの年輪を重ねているといわれる。

A マウルの主な体験プログラムは、4 つに分けられる。第一は、森林浴、洞窟体験、星の観察など、生態体験と称するものである。第二は、山菜採り、溪流での水遊びや魚とり、山村民宿、木工品作りなど、山村体験と称するものである。第三は、田植え、各種作物の種まき、合鴨の水田への放鳥、唐辛子・トウモロコシ・スイカの収穫、いも掘り、イナゴ取り、凧揚げなど、農業農村体験と称するものである。第四は、豆腐作り、醤油作り、餅作り、柿酢作りなど、郷土料理作り体験と称するものである。

以上のような「豊かな自然を売りもの」にした GT は他のマウルにも見られるが、A マウルは、マウル独自の規約まで設けて、自然環境や景観の保全に努めている点が注目される。2003 年には「A マウル住民自治規約」を制定し、木や石を利用した昔ながらの建築物を保全する点、セメント使用の建築物を新設しない点などを住民間で取り決めている。また、溪流周辺での料理・飲食を禁止し、その旨を注意喚起する看板や横断幕も設置している。こうした特色ある環境・景観保全への積極的な取り組みが、GT 来訪者にも高く評価され、他のマウルにおける GT との差別化にも貢献したものと推察される。

3) A マウルにおけるグリーン・ツーリズム活動の実績

A マウルで実施されてきた GT 関連事業は、表 1 のとおりである。山村開発事業では、きのこ栽培舎などを設置し、緑色農村体験マウル事業では、バンガローなどを設置した。情報化マウル事業では、パソコンを設置し、A マウルのホームページを開設した。農村マウル総合開発事業では、石垣の整備などを実施した。

訪問客は、増加している（表 2）。客層としては、団体客が多い傾向にある。

訪問客のデータベース化も実施している。データベースは、マウルにおける行事案内などの広報活動に利用されている。データベースの管理は、代表（リーダー）の C 氏ではなく、マウルの事務長が担当している。

マウルに事務長を置く理由は、C 氏などを含む地元住民が農作業などに従事しており、GT に関わる実務にまで、十分に手が回らないことによる。このため、専従で事務を掌管する事務長職を設置している。事務長の主な役割は、①訪問客の予約受付、②マウル内のガイド、③面（日本の村に相当）役場からの連絡事項をマウル住民へ伝達すること、④マウル住民の意見を面役場に伝達すること、などである。よって、事務長は代表（リーダー）の C 氏を補佐する役割を担っている。

A マウルにおける GT 関連収入を示したのが表 3 である。2005 年の収入（合計）は、2004 年の約 2 倍に増加している。

C 氏は、2007 年まで GT 運営の代表（リーダー）と里長を兼務していた。しかしその後、GT 事業の

表 1. A マウルで実施された事業

施行期間	事業名	所管官庁	主たる事業内容
1998年1月～2001年12月	山村開発事業	山林庁	きのこ栽培舎の建設や木橋の設置など
2003年1月～2003年12月	緑色農村体験マウル事業	農林部	伝統文化体験館, バンガロー, 案内板の設置, 石垣の整備
2004年1月～2004年9月	情報化マウル事業	行政自治部	コンピューターやインターネットの整備, マウルのホームページ作成など
2004年1月～現在	農村マウル総合開発事業	農林部	野生花栽培や石垣の整備など

注：上記の内容はC氏からの聞き取りによる。

表 2. A マウルにおける年別訪問客数（のべ人数）

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007
訪問客数	650	2,801	7,400	18,000	25,000	27,000

注：1) 2002年から2007年までの人数はC氏からの聞き取りによる。ただし、2007年の人数に関しては見込みである。また、上記の人数は同一年に複数回マウルを訪問したリピーターの数が重複して含まれている。

2) 各年は1月から12月までを示す。

表 3. A マウルのグリーン・ツーリズム関連収入の実績（単位：千ウォン）

年次	農産物販売	宿泊	食堂	プログラム運営	その他	合計
2004	88,990 70.9%	11,575 9.2%	18,895 15.0%	2,500 2.0%	3,600 2.9%	125,560 100%
2005	154,401 64.9%	24,715 10.4%	35,556 14.9%	8,710 3.7%	14,490 6.1%	237,872 100%
2006	59,266 23.2%	57,643 22.6%	48,941 19.2%	80,300 31.5%	8,900 3.5%	255,050 100%

注：1) 上記の収入は当該年次の1月から12月までの実績である。

2) 上記の実績はC氏からの聞き取りによる。

本格化に伴い、里長を退き、GT運営の代表（リーダー）としてGT運営に専念することになった。

3. B マウルの事例

(1) B マウルの概要

B マウルは、京畿道の利川（イチョン）市に立地している一集落であり、ソウル市から車で（高速道路を利用）、1時間程度の距離に位置する。利川市自体が、ソウル近郊の他市に比べ、都市化があまり進展しておらず、B マウルも典型的な農村風景を維持している。B マウルには、30 戸（うち農家は24 戸）

の世帯が居住している。耕地面積は60 ha であり、主として米、桃、ブドウ、唐辛子などが生産されている。1990 年代以降は、主力作物である米、桃、ブドウに対して独自のブランドを確立し⁶⁾、さらには合鴨やタニシを利用した環境保全型農業も実践して農産物の品質向上にも努めている⁷⁾。

(2) B マウルにおけるグリーン・ツーリズムの展開

1) グリーン・ツーリズム活動開始の契機

B マウルのGT 活動は、マウルの総務を務めるL 氏の兄夫妻の発案で開始された。L 氏が務めるマウルの総務とは、B マウルにおいてGT 活動の実質的なリーダーを意味する職階である。L 氏は、里長を兼務しておらず、GT 活動に専従している。

L 氏の兄はB マウル出身で、大統領直属の農漁業・農漁村特別対策委員会事務局長も歴任した人物である。政府による米の買収量が減少することを予想し、稲作などの農業生産以外にも、生き残り方を模索するよう提案した(宋他[15])。その方策がGT であった。2002 年には、B マウルの住民にGT 事情を学んでもらうため、GT の専門家をB マウルへ招聘した。さらには江原道の土厘米（トゴミ）・マウルや忠清南道の文撞里（ムンダンリ）・マウルなど、韓国GT の先進地見学も実施して住民意識を高め、GT への参加を呼びかけた。こうして、B マウルでは、農家を含め、全世帯がGT 活動に参加するようになった。

2) B マウルの観光資源と体験プログラム

B マウルの観光資源として、前述のように環境保全型農業の実践で生産された農産物（米、桃、ブドウ）の外に、陶芸家（陶器作りの体験プログラムを担当）や民族音楽家（民族音楽「風物（プンムル）」を担当）の存在を挙げることができる。特に、陶器作り体験と民族音楽体験の指導者は、B マウルの出身者ではなく、他地域からの移住者である点が注目される。

表4. Bマウルで実施された事業

施行期間	事業名	所管官庁	主たる事業内容
2002年12月～2003年12月	緑色農村体験マウル事業	農林部	駐車場の整備, 案内板の設置など
2004年1月～2004年12月	情報化マウル事業	行政自治部	コンピューターやインターネットの整備, マウルのホームページ作成など
2004年4月～現在	農村マウル総合開発事業	農林部	汚水処理場, 多目的体験館の建設など

注：上記の内容はL氏からの聞き取りによる。

表5. Bマウルにおける年別訪問客数（のべ人数）

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007
訪問客数	1,413	3,700	11,969	17,541	21,000	26,000

注：1) 2002年から2005年までの人数は宋他[15]より引用（韓国語）。2006年と2007年の人数はL氏からの聞き取りによる。ただし、2007年の人数に関しては見込みである。また、上記の人数は同一年に複数回マウルを訪問したリピーターの数重複して含まれている。

2) 各年は1月から12月までを示す。

Bマウルは、李氏朝鮮時代から続く儒教思想を基盤として、安城李氏という家門を重視した共同体意識の強いマウルの一つである（金[6]）。とはいえ、Bマウルでは、全く地縁・血縁のない移住者をマウルから排除することなく、むしろ特定技能に秀でた人材として積極的に受け入れてきた⁸⁾。こうした対応が、マウル内の観光資源に厚みを持たせ、他のマウルにおけるGTとは差別化された特色ある体験プログラムの提供を可能としたものと推察される。

Bマウルの主な体験プログラムは、以下の通りである。第一に、民族音楽体験、陶器作り、餅・豆腐作りなどである。第二に、各種作物の種まき体験、親子の魚釣り体験、山菜採りなどである。第三に、じゃがいも掘り、トウモロコシの収穫、タニシ採取などである。第四に、稲・果物・豆の収穫、どんぐり拾い、イナゴ取りなどである。第五に、韓紙作り、醤油作りなどである。

3) Bマウルにおけるグリーン・ツーリズム活動の実績

Bマウルで実施されてきたGT関連事業は、表4のとおりである。緑色農村体験マウル事業では、駐車場を整備し、マウルの案内板を新設した。情報化マウル事業では、パソコンを設置し、Bマウルのホームページを開設した。農村マウル総合開発事業では、汚水処理場などを建設した。

訪問客は、増加している（表5）。客層としては、Bマウルが首都圏であるソウル市近郊に立地しているため、都市居住者による日帰り客が多い傾向にある。

訪問客は、Bマウルの会員になることもできる。マウルの事務長が会員情報をデータベース化し、マウルのイベント情報などを発信している。また、マウルの事務長は、会員の情報管理以外に、客からの予約受付なども担っており、マウルの総務（GT活動の実質的なリーダー）であるL氏の業務負担軽減に貢献している（宋他[14]）。

4. おわりに

本稿では、韓国の地域経営型グリーン・ツーリズム（GT）の先進事例（忠清北道Aマウルと京畿道Bマウル）が、浦出・宮崎[17]の問題提起した2点（「GT内容の差別化」と「GTリーダーの確保」）に関し、どのように対応しているかという点に着目した事例分析を試みた。

Aマウルに関しては、次の点が明らかとなった。

- ①観光資源として、けやきの森、洞窟、溪流などがあり、豊かな自然に恵まれている。このような資源を活かし、多様な体験プログラムを実施している。Aマウル独自の住民自治規約も制定し、村の景観維持にも努めている。
- ②マウルの代表（リーダー）C氏は2008年から里長の兼務を辞め、GT活動に専従する態勢をとるようになった。さらにC氏を補佐する事務長を置き、役割分担がなされている。
- ③Aマウルでは、訪問客が年々増加していた。

Bマウルに関しては、次の点が明らかとなった。

- ①観光資源として、環境保全型農業の実践による品質の高い農産物の生産などに加え、陶芸家や民族音楽家（いずれもマウル外部からの移住者）の存在を挙げることができる。このような資源を活かし、農産物の収穫体験などに加え、陶器作り体験

や民族音楽体験などの特色ある文化的体験プログラムも実施している。

- ②マウルの総務（実質的なリーダー）L氏は、里長を兼務しておらず、GT活動に専従している。さらにL氏を補佐する事務長を置き、役割分担がなされている。

- ③Bマウルでは、訪問客が年々増加していた。

以上のように、両事例とも、GTリーダーを確保し、GT内容の差別化が試みられている点が明らかとなった⁹⁾。GTに精通したリーダーやリーダーを補佐する人材を確保し、そのリーダーが地域資源の特徴を上手く引き出してGT内容の差別化を図るという知見は、わが国GT発展への示唆を与えうる視点ともいえよう。

〔付記〕朴時炫氏（韓国農村経済研究院）からは、韓国のGT事情などについて有益な助言を頂いた。柳承宇氏と宋美玲氏（韓国農村経済研究院）からは、韓国のGTに関する資料等の提供を頂いた。本論文の草稿を地域農林経済学会大会で(2008年10月25日、神戸大学)報告した際には座長の浦出俊和氏（大阪府立大学）やフロアーの質問者の方々から有益なご意見を頂いた。これらの方々に、記して謝意を表する。

注 1) 観光農園事業の目的は、農業生産を基盤とした上で、営農体験や農家宿泊体験などを通じて、都市と農村の交流を促進し、併せて農家所得の増大を図ることである（李 [4]）。なお、韓国GTの全体像やマウル単位によるGTの基礎情報などは、すでに金 [6] や宮崎 [9] で詳述されているため、本稿では紙数の制約から触れないこととする。また、1980年代以降の韓国GTの政策展開は、浦出・宮崎 [17] を参照されたい。

2) 2002年には農林部のみならず、行政自治部（日本の旧自治省に相当）「美しいマウル作り事業」（2003年に中断）、農村振興庁「農村伝統テーマ・マウル事業」など、複数の官庁がGTの事業に乗り出した（姜[5]）。

3) 韓国におけるGTの既存研究として、ヨーロッパや日本などの取り組みや政策を論じた論文（宋 [13]）、韓国におけるGT定着のための政策課題を論じた論文（朴 [10]）、韓国におけるGTの事例を分析した論文（柳他 [16]、宋他 [14]）、GTの持続可能性を論じた論文（裴・金 [11]、鄭他 [1]、金他 [7]）、GTの計量分析を行った論文（李 [3]、

曹 [2]）などがある。

- 4) 本稿ではGTリーダーの確保に関して、2通りの場合を想定している。1つはGTを運営できる里長以外のGTリーダーが確保されている場合である。もう一つは、GTリーダーを兼務している里長を実質的なGTリーダーとして補佐できる人材などが確保されている場合である。これら2通りの場合のうち、いずれか一方でも満たせば、本稿ではGTリーダーが確保されていると見なす。
- 5) Aマウルを取り上げた論文や文献を見つけることはできなかったが、Aマウルは2006年12月13日に韓国農村公社主催の第5回農村マウル競技会で優秀農村体験村に選定されている。一方、Bマウルに関しては、宋他 [14] が先進事例であると述べており、浦出・宮崎 [17] の調査対象地にもBマウルが含まれている。なお、分析対象を先進事例に限定した理由として、「GT内容の差別化」や「GTリーダーの確保」の問題を克服しようとする取り組み例は、先進事例において、発見できる確率が高いと推察されるためである。
- 6) ブドウは1993年に「栗面ブドウ」、桃は1994年に「長湖院桃」、米は1998年に「王様標利川米」というブランド名が付けられている。
- 7) Bマウルで生産される合鴨農法による米は、2002年に国立農産物品質管理院から無農薬栽培の認証を受けた。また、Bマウル産の梨やブドウにおいても1999年に国立農産物品質管理院から低農薬栽培の認証を受けたものがある。
- 8) Bマウルの事務長も地縁・血縁のない外来者である（宋他 [14]）。
- 9) GTリーダーの確保によるGT運営上の効果としては、GTの差別化を促進させ、訪問客を増加させる効果などが推察されるとはいえ、GTリーダーの確保とGT運営の間における因果関係の明示的な分析は、本稿でなされておらず、今後の課題である。

引用文献

- [1] 鄭 健鎬・卞 效僅・金 寄洪「持続可能な韓国型農村観光の開発に関する研究」、『観光・レジャー研究』第16巻第1号（2004年）、pp. 85-104（韓国語）。
- [2] 曹 祿煥「都市住民のグリーン・ツーリズム選好度の調査分析」、『農村観光研究』第11巻1号（2004年）、pp. 10-40（韓国語）。
- [3] 李 希燦「農村観光需要の決定要因」、『観光農業研究』第10巻1号（2003年）、pp. 130-

- 143 (韓国語).
- [4] 李 丞燦「観光農園開発事業の政策方向」,『観光農業研究』第 7 巻 1 号 (2000 年), pp. 19-36 (韓国語).
- [5] 姜 信謙「マウル単位農村観光開発の推進と課題」,『観光農業研究』第 11 巻 1 号 (2004 年), pp. 122-140 (韓国語).
- [6] 金 範洙「韓国のグリーン・ツーリズム」, 宮崎猛編著『これからのグリーン・ツーリズム ヨーロッパ型から東アジア型へ』家の光協会, 2002 年, pp. 122-145.
- [7] 金 大植・權 容大・崔 洙明・林 昌洙「農村観光基盤の持続可能なマウル整備類型の設定」,『農村計画』Vol. 11, No. 1 (2005 年), pp. 45-53 (韓国語).
- [8] 宮崎 猛・柳 承宇・古塚秀夫・浦出俊和・張 綿珠「農村伝統文化を活用したグリーンツーリズムに関する日韓比較研究 ―国内旅行の定着条件と日韓観光交流の成立条件―」,『青丘学術論集』第 20 集 (2002 年), pp. 231-340.
- [9] 宮崎 猛編『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム』, 昭和堂, 2006 年.
- [10] 朴 時炫「韓国型農村観光定着のための政策課題」,『観光農業研究』第 9 巻 1 号 (2002 年), pp. 61-79 (韓国語).
- [11] 裴 聖義・金 正兌「持続可能な農村建設のための農村観光発展方向: 忠清南道洪城郡文撞里の事例」,『韓国農村指導学会誌』第 10 巻 第 1 号 (2003 年), pp. 77-85 (韓国語).
- [12] 宋 廣仁「韓国と外国のグリーン・ツーリズム政策の比較に関する研究」,『観光農業研究』第 10 巻 1 号 (2003 年), pp. 144-156 (韓国語).
- [13] 宋 廣仁「グリーン・ツーリズムを通じた農村地域活性化に関する研究」,『農村観光研究』第 11 巻 1 号 (2004 年), pp. 155-169 (韓国語).
- [14] 宋 美玲・金 廷燮・朴 注映・呉 亨恩・黃 靖壬『農村地域の革新事例』, 韓国農村経済研究院, 2006 年 (韓国語).
- [15] 宋 美玲・成 周仁・朴 昶鐵・金 廷燮・朴 注映『農村の変化を見る 住みよい農村作りの事例と含意』, 韓国農村経済研究院, 2006 年 (韓国語).
- [16] 柳 承宇・池 麟培・李 揆旻「農村伝統文化を活用したグリーン・ツーリズムに関する研究 ―全羅北道淳昌郡を中心として―」,『観光農業研究』第 10 巻 1 号 (2003 年), pp. 157-175 (韓国語).
- [17] 浦出俊和・宮崎 猛「韓国におけるグリーン・ツーリズムの新展開 ―地域経営型グリーン・ツーリズムの特徴と問題点―」,『農林業問題研究』第 41 巻 第 1 号 (2005 年), pp. 246-250.